

新しい能力

副会長 佐川和則（近畿大学）

PISAとは、斜塔で有名なイタリアの街ではなく、経済協力開発機構（OECD）が3年ごとに行う国際学習到達度調査のことである。これは義務教育の最終段階にある15歳の生徒を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決能力を調査し国別に順位をつけるため、そのたびに順位が上がった下がったと大騒ぎになる。日本は調査した65の国と地域（2009年）のなかでどれも10位以内に入っているのだからそれほど悪い成績ではない。ではどうしてそんなに注目されるのだろうか。実は「読解力」は2000年の調査で8位だったのが、2003年と2006年の調査ではベストテンを逃したことが問題視されたようだ。

もっとも「読解力」に限らず「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」そして「問題解決能力」は、単に知識の量ではなく、世の中を生き抜くための実践力・応用力である。この点で、入試問題に代表されるような知識の多さを測る学力検査とは一線を画している。高等教育においても、大学版PISAといわれるAHELO（高等教育における学習成果の評価）が試行的に実施されている。AHELOの評価は、これまでの偏差値に代わる新しい「ものさし」としての機能をもつ可能性があるため、各大学ではそれに参加すべきかどうかを検討されている。

また、社会人として備えるべき能力として、基本的な知識・スキルに加え、問題解決、創造性、意思決定などの高次の認知能力、コミュニケーション、チームワーク、リーダーシップなどの対人関係能力、そして自尊心、責任感、忍耐力などの人格特性までもが高等教育で育成されるべきとの主張がなされ（就職基礎力＝厚生労働省、社会人基礎力＝経済産業省、学士力＝文部科学省）、大学はその対応を迫られている。これらの〈新しい能力〉は〈コンピテンシー〉とも呼ばれ、「ある職業や作業において安定した業績をあげている人材に共通してみられる行動特性」とされる。

これらの社会的要請に応えるために、大学では〈新しい能力〉の育成方針をカリキュラム・ポリシーに明記し、それにしたがったカリキュラム・マップを作成し、シラバスにはその授業科目がどのようなコンピテンシーを養うのかを明記することになるかもしれない。

ところで、体育実技が養いうるコンピテンシーはなんだろう。健康管理能力、生涯にわたってスポーツを楽しむ態度、リーダーシップ、忍耐力などが浮かんでくる。体育実技が様々なコンピテンシーの育成に関与することは確かだが、問題はその評価である。ディプロマ・ポリシーの精神にしたがえば、各授業科目はその授業を受講することによって何が“できるようになったか”を評価する必要があるからである。健康管理能力やリーダーシップが身についたかどうかはどのように確かめられるのだろうか。これからの体育実技は、オーバーハンドパスやフォアハンドストロークが上手にできるようになったかどうかを評価するのではなく、〈新しい能力〉を獲得できたか否かを評価することを迫られている。